



Part3



「二宮金次郎」晩年

先週に引き続き、二宮金次郎、尊徳の晩年をお話しします。

忠真公の命を受け、全ての家財を処分し桜町に移住して再建に着手しました。貧しくなると百姓たちの心が荒んでいきます。

心が荒むと、生きる希望を失ってしまいます。

「心とところの結びつきによって、荒れた土地を復活させよう」と、まず土地を共同で管理、所有して、みんなで利益を上げる仕組み、世界初の協同組合を立ち上げます。当初は村民の抵抗もあり、「祖先の土地を他人に差し出したら、祖先が悲しむ」、「土地が二度と返ってこなくなったらどうする」等、難航しましたが江戸屋敷より赴任していた横山周平の助けもあり、反対していた村民も、次第に協同組合に参加していくようになります。

また、尊徳は荒れた土地の開墾を奨励し

ます。新しく開墾した田畑には一定期間、年貢を免除される、鋤下年季(くわしたねんき)制度を活用しました。

その結果、個人で百姓をするよりも、はるかに効率的に生産ができるようになり、百姓たちの生活は大きく改善されました。



桜町 陣屋跡

しかし、良き理解者であった横山周平が江戸に戻り、代わりに豊田庄作という役人が赴任しました。豊田は百姓上がりの尊徳が桜町主席に昇進していることを嫉み、尊徳のやり方にことごとく反対し、復興政策に行き詰ることもありました。そんな時、尊徳は役人や村人に反感を持たれるのは自分のやり方に真心がこもっていないからと、突然行方不明となり、成田山新勝寺に籠り、断食修業で道を切り開きました。桜町に移住して10年の歳月が流れ、漸く再興を成し遂げます。ある時、ナスを食べたところ、夏の前というのに秋のナスの味がしたことから、冷夏になることを予想し、村人にヒエを植えさせました。予想通り冷夏となり、世にいうところの「天保の大飢饉」が発生しました。桜町では尊徳の言い付けを守り、ヒエの蓄えがあった、お陰で餓死者が出なかったばかりか、余分のヒエを周辺の村々に分け与えることができました。尊徳が手掛けた復興事業は栃木県内の桜町や青木村等を始め、600ヶ所以上に上りました。

栃木県に金次郎の座像を建てる理由がお分かりいただけると思います。

尊徳は「道徳なき経済は罪悪であり経済なき道徳は戯言(ざれごと)である」と言い残し、弟子たちに看守られながら享年70歳でこの世を去りました。



壹円札 二宮尊徳

尊徳の教え、「報徳仕法」は富田高慶を始め、多くの弟子たちによって受け継がれました。